

お盆で鹿児島に帰省したら、集落の自治会が、帰省者を囲んで懇親会をするという案内が来た。なにせ日頃、高齢者だけ世帯の老父母がお世話になっているご近所のことであるから、感謝の一言も述べないと罰が当たると出席した。行ってみると、なんとテレビカメラが回っているではないか。ボクはドギマギしたが、地元の人はいたって平気だった。ボクの故郷は、集落名を「六月田下」と称して、なんと集落名でホームページを検索すると、わんさと情報が出てくるほど有名なのである。この日も、そんな有名な集落の取材に、テレビ局がやってきたというわけである。

何故有名なのかと言うと、昨年、低炭素地域づくり全国フォーラムで準グランプリを獲得したからである。どういうことかと言うと、集落挙げて2006年からCO₂削減に取り組み、07年度で、集落全体のCO₂排出量を6.1%、一戸あたり光熱費を年間2.9万円削減するなど、4年連続で目標を達成した、いわば「エコ集落」で、その実績が松本龍環境大臣（当時）から表彰されたというわけである。

たった58世帯で、65歳以上の高齢化率は40%という、まさに「限界集落」なんだが、表彰のために大挙して上京するわ、代表がイギリスには行くわ、テレビや新聞が押しかけるわ、わが小集落は大騒動の一年だったとの



ボクの故郷は「エコ集落」

こと。テレビやホームページには、ボクの父母や親戚も「エコ達人」と紹介され、お世話してくれている幼友達もアップで登場した。ボクは、なんと、懇親会でテレビカメラの前でカラオケを唄うはめにもなり、へたくそな「高校三年生（舟木一夫）」を唄った。もちろん、放送ではカットされているとは思うのだが。そして、幼友達から、故郷の小集落の日常をいっぱい聞いて還ってきた。

かつては「部落」と言い、部落問題の関係で一時期「集落」と言い変えたが、おさまりが悪いからいまでは「自治会」と称している田舎の小コミュニティ。ボクの幼友達たちは、やっぱり「部落」「部落民」という呼称が一番しっくりくるよなあと言った。当然、被差別部落のことも話題になったし、「サンカ」のことも、水俣病のことも話題になった。近くの漁村集落が、近年集落呼称変えたのは、差別が原因だったことも聞いた。

ボクは、ボクの田舎に、かつては部落差別のまなざしや、水俣病での漁村、農村の抗争の関係もあったが（もちろん、いまでも後遺症を残しているが）、集落を単位にした野球のようなリーグが変わらず続いていることに、不思議な感銘を覚えた。かつて同じリーグのある部落が部落解放運動で走ったように、いま、ボクの故郷のチームは「エコ」で走っていた。

（株）ナイス代表取締役 冨田一幸



hidarimakiの
この逸編

雨月物語



監督：溝口健二
原作：上田秋成
撮影：宮川一夫
音楽：早坂文雄
キャスト：森雅之
田中絹代
京マチ子
水戸光子
製作：大映作品
公開：1951年
モノクロ 97min
DVD規格：Cosmo Contents

六下順二の戯曲「夕鶴」は、日本民話「鶴女房」を題材として何度も上演されたが、ここに登場する鶴の化身“つう”という存在は心のありかを体現しており、彼女を助けた与ひょうや、彼をそそのかす“運ず”と“惣ど”は物欲の典型として描かれる。人間のなりふりかまわない欲望が犠牲を伴うという教訓なのだが、映画「雨月物語」も、上田秋成の怪異小説「雨月物語」をベースにして、金銭欲、物欲などあくなき欲望に翻弄される人間たちを、夕鶴風な、あるいは民話的おとぎ話として描かれた優秀な作品であった。

なによりも、溝口監督演出の詩情性を映像で支えていたのが、カメラマンの宮川一夫であった。宮川は名カメラマンとして知られ、その手法は世界の監督に影響を与えたといわれている。溝口監督ほか黒澤監督の「羅生門」(50年)、市川崑監督の「おとうと」(60年)など著名な監督作品のカメラマンとして、若い頃の僕らでさえ宮川の名を知っ

ていた。

数十年前、「雨月物語」再上映のある劇場で、たまたま撮影者の宮川一夫がゲストで登壇し、溝口監督のこと、自身の撮影にまつわる話題を聞かせてくれたことがあったが、宮川の撮影技術は、監督たちの演出に大きな貢献をしていると感じさせる印象であった。

近江の湖北の村で暮らす兄妹夫婦2組のエピソードを中心に物語は展開する。陶工の源十郎は町に出て陶器で金を稼ぐことを夢み、義弟の藤兵衛は侍になることに必死だ。しかし彼らの妻たちは、貧しくとも今の生活をと説得するが聞く耳を持たない。戦乱が激しくなりそれぞれが離ればなれになる。源十郎の妻は子どもを残し侍に殺され、藤兵衛の妻は侍たちから陵辱を受け、身を売る家業に堕してしまふ。一方源十郎は、城下町で会った美しい女若狭に見初められ、荒れた朽木屋敷に案内されて歓待を受け、若狭と契りを交わし愛欲に身をゆだねる。しかし若狭と一緒に黄泉の国で暮らそうと誘う。彼女は廃屋に憑いた亡霊であり、源十郎は亡霊と快樂を共にしていたのだ。藤兵衛もまた侍になりそこね、二人は無一文のままほうほうの体で故郷にたどり着く。

怨霊が棲む屋敷の女官たちが、廊下に灯明をともらせるシーンの幽玄な美しさ、川舟が琵琶湖を下る幻想的な場面、亡くなったはずの妻が亡霊となって夫を迎える切なく哀しいシーン、何より能面のような静かな美しさから女の妖艶さを見せ、遂には物の怪に変化していく京マチ子の表情の怖さは凄絶だ。人間の欲望の果てを語ってしばし沈黙させられる逸編であった。

hidarimaki

